

## [課題演習報告]

# コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進に関する研究 —地域連携カリキュラムのマネジメントを中心に—

坂 田 歩  
Ayumi SAKATA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻学校運営リーダーコース  
春日市立春日野小学校

(2022年1月12日受理)

本研究は、春日市における地域連携カリキュラムのマネジメントを通して、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進の在り方を究明することを目的としている。そのために、地域学校協働活動推進員と教職員が関わり合いながらの地域連携カリキュラムの見直しを行い、地域学校協働活動と学校運営協議会のPDCAサイクルを効果的に回した。その結果、地域・学校・家庭での目標・目的の共有化が図られ、教職員の当事者意識に向上が見られるとともに、地域連携カリキュラムへの理解が深まり、一体的推進のためのマネジメントの効果が明らかになった。

**キーワード：**コミュニティ・スクール，地域学校協働活動，地域学校協働活動推進員，地域連携カリキュラム，社会に開かれた教育課程

## 1 主題設定の理由

### (1) 現代社会の要請から

近年、学校、家庭、地域を取り巻く課題は複雑化、多様化している。また、教育課程企画特別部会「論点整理」(2015)において「これからの教育課程には、社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく『社会に開かれた教育課程』としての役割が期待されている」<sup>1)</sup>とある。このような状況を踏まえ、中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」(2016)では、学校は「『社会に開かれた教育課程』の実現に向けて、地域との連携・協働を一層進めていくとともに、地域においても子供たちの成長を支える活動により主体的に参画していくこと」<sup>2)</sup>が求められている。

### (2) 春日市の要請から

平成16年に学校運営協議会制度が導入されて以降、コミュニティ・スクールが広がり、地域住

民や保護者等が力を合わせて学校の運営に取り組む動きが進展してきた。春日市でも平成17年度よりコミュニティ・スクールがスタートし、各学校に合わせた実働推進組織がつくられ、保護者や地域住民を学校に取り込んだ支援活動や、地域連携カリキュラムの策定などの成果が表れている。この成果の上に立ち、地方創生の実現のために、学校運営協議会の機能を向上させ、地域学校協働活動推進員を中心とした地域学校協働活動の機能を大切にしつつ、両者の一体的な推進を行っていくことで、地域とともにある学校、学校を核とした地域づくりへの転換が期待できる。

### (3) 在籍校の実態から

在籍校である春日市立春日野小学校は、平成20年度よりコミュニティ・スクールとして、地域・家庭と連携しながら学校運営を行ってきており、本年度で13年目となる。実働推進組織としては支援組織方式を取り入れており、学力向上応援団、読書・図書館応援団、心づくり応援団、体づくり応援団、安心・安全な街づくり応援団という5つの応援団組織に保護者ボランティアを募り、学校を支援していただいていた。また、地域

教育の資源を調査し、地域連携カリキュラムを策定したことにより、地域人材や施設等を活用する教育活動が行われてきている。しかし、春日市におけるCS進捗状況評価の結果から、教員・児童へのコミュニティ・スクールの目的や仕組みについての周知が減少してきていることが課題として見えてきた(図1)。

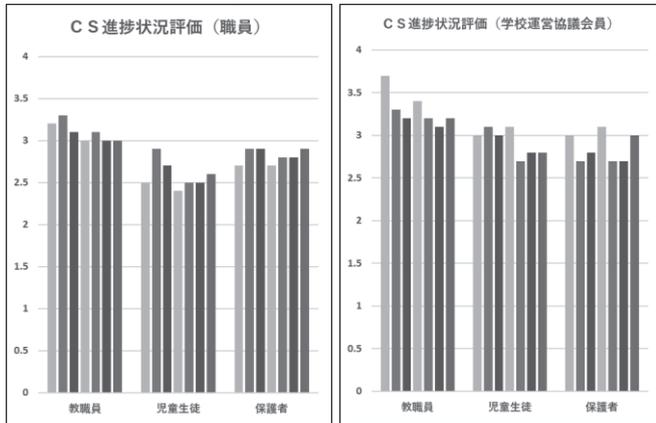


図1 CS進捗状況評価の結果(4件法, H28~R1分)

また、支援組織方式で進めてきた結果、保護者からの学校に対する支援状況の評価は高い一方で、学校からの地域に対する貢献状況や、春日市の地域連携カリキュラムにおける4視点のうち、「地域に還す」「地域と学ぶ」という視点でのカリキュラムの整備・取組状況の評価が低いという課題が見えてきた。

そこで、学校が主体であった「学校支援活動」から地域と学校が連携・協働して、地域全体で子どもたちを育てていく「地域学校協働活動」へと発展することによって、より一層の教育効果を生むコミュニティ・スクールになると考える。

## 2 研究主題・副題の意味

(1) 「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動」とは

「コミュニティ・スクール」とは学校運営協議会を設置している学校のことであり、「地域学校協働活動」とは、地域住民、保護者、学生、NPO等、幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支える活動のことである。

(2) 「一体的推進」とは

「一体的推進」とはコミュニティ・スクールの母体である学校運営協議会と、地域学校協働活動のそれぞれの立場からPDCAサイクルを機能させて、関連付けながら推進していくことである。それぞれの活動が別々に行われるのではな

く、同じ目標・目的をもち、実践の振り返りを行う中で見つけられた課題を学校運営協議会で熟議することにより、改善案を生み出し一体的推進(図2)を目指していく。

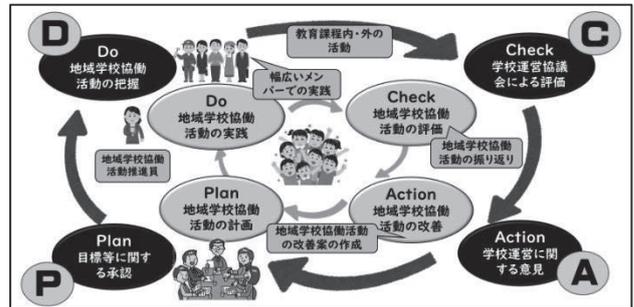


図2 一体的推進のイメージ

(3) 「地域連携カリキュラムのマネジメント」とは

「春日市発! コミュニティ・スクールの魅力」(2011)において、学校・家庭・地域の連携については図3のように示されている。

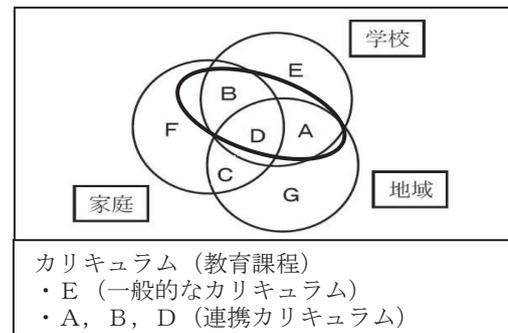


図3 連携に着目した取組

学校の取組の軸はA, B, D, Eであるが、コミュニティ・スクールにあってはA, B, Dのカリキュラムの工夫が求められる。春日市における「地域連携カリキュラム」とは、「地域を生かす」「地域を学ぶ」「地域に還す」「地域と学ぶ」という4類型のことである。そのカリキュラムを編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくことがマネジメントを行うということにつながる。と考える。

## 3 研究の目的

地域連携カリキュラムのマネジメントを中心に、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進の在り方を究明する。

## 4 研究の仮説

地域連携カリキュラムを中心とした地域学校協働活動のPDCAサイクルを確立するマネジメント

を行えば、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進が図られ、より一層の教育効果を生むコミュニティ・スクールへと発展するであろう。

### 5 仮説説明の具体的方策

#### (1) 地域連携カリキュラムの見直し

- ① 目標・目的の共有
  - ② カリキュラムの見直し
    - ア 強化・重点化
    - イ 開発・改善
  - ③ 次年度のカリキュラム案の作成
- (2) 地域学校協働活動のPDCAサイクルの確立
- ① 重点目標の設定 (P 段階)
  - ② 活動と相談会の実施 (D 段階)
  - ③ 振り返りと地域合同研修会の実施 (C・A 段階)
    - ア 推進員会議での振り返り
    - イ 地域合同研修会
- (3) 学校運営協議会の在り方の見直し

### 6 研究の実際

#### (1) 地域連携カリキュラムの見直し

① 目標・目的の共有

まずは、職員研修でこれからのコミュニティ・スクールとしての学校の役割を確認し、コミュニティ・スクールとしての意義や目的の共有化を図った。さらに、次年度に向けて、総合的な学習の時間と生活科のカリキュラムを見直す必要性を感じた。見直すためには、共通の目標やそれに向けた目指す子どもの姿が必要である。そこで、目標である「市民性の育成」を各学年の目指す子どもの姿で考え直し、「地域愛の高まり」と「自己有用感の高まり」という2本の柱で整備し直した(図4)。

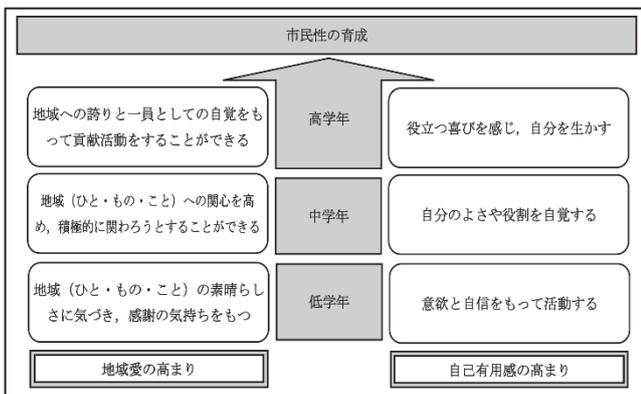
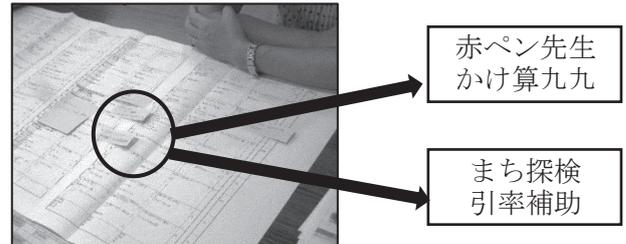


図4 整備した2本の柱

#### ② カリキュラムの見直し

##### ア 強化・重点化

今ある地域連携カリキュラムを見直し、より効果的な関わり方について考えたり、他に地域連携した方が効果が上がりやすい学習はないかという視点で考えたりして、カリキュラムの中に書き込んでもらった(資料1)。その際に、地域学校協働活動推進員にも関わってもらうようにして、相談し合いながらカリキュラムを見直す姿が見られた。



資料1 ワークショップ(2年生)

##### イ 開発・改善

昨年度の状況により、たくさんの地域連携カリキュラムの学習がストップしてしまっていたので、方法を変えて、地域連携ができるようにならないだろうかという視点での見直しを図った。それぞれの学年でアイデアを出し合いながら、地域学校協働活動推進員とも相談し合いながら進めていく姿が見られた(資料2)。



資料2 カリキュラム見直しの様子

#### ③ 次年度のカリキュラム案の作成

図5が目指す子どもの姿をもとに単元を見直した結果である。

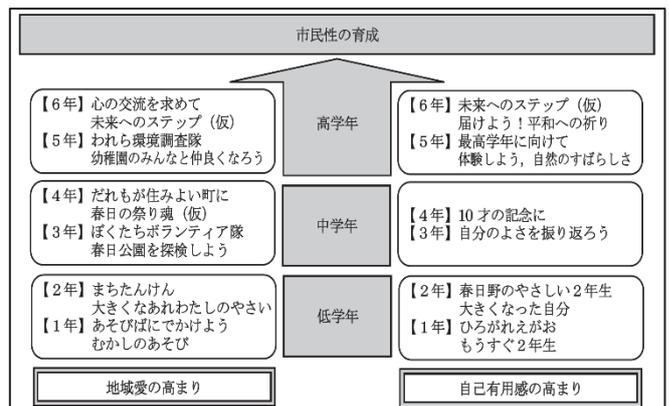


図5 柱に合わせて見直した単元

低学年は、生活科の内容において、地域愛や自己有用感を高めるために、どの場面で地域連携を図るかを考え直す姿が見られた。

地域の素晴らしさはもちろんであるが、まずは、身近な保護者を巻き込みながら、地域の方々とも関わりをもてるように考えていった。また、3年生・5年生では、2本の柱で見直しを図り、単元はそのままであるが、地域の方々との関わりをもつ大切さを再度確認し、課題を持たせる段階で、地域に出ていく学習を仕組むことや、最後の段階で、校内だけで終わらせず、地域へ発信するなどの工夫を考えることができた。4年生・6年生は、目指す子どもの姿に結びつきにくい部分があったので思い切って単元開発を行うことにした。4年生では、社会科で学習する春日に伝わる祭りと結び付けた「春日の祭り魂(仮)」という単元を、6年生では、たくさんの地域で働く方との関わりが持てるように「未来へのステップ(仮)」という単元を開発した。実施後の職員アンケートでも前向きな意見が多く見られ(表1)、教職員が自分たちでカリキュラム・マネジメントを図っていくことの大切さを感じる。

表1 研修後の教職員の感想

- ・子どもたちが「やらされ感」ではなく、「自分で解決したい」と思うカリキュラム開発の必要性を感じた。
- ・地域を生かした活動をたくさん考えることができてよかった。子どもが興味をもって主体的に取り組める活動をもっと考えたい。
- ・地域貢献活動に結び付けて考えることができた。

また、次年度の5月には、第1回学校運営協議会で目指す子どもの姿を提案し、共有化を図っていった。これを繰り返しながら、学校運営協議会の方々の意見を取り入れつつ、改善できる仕組みをつくっていくことがこれからのコミュニティ・スクールの在り方であると考えた。

## (2) 地域学校協働活動のPDCAサイクルの確立

### ① 重点目標の設定 (P 段階)

今年度は、地域学校協働活動推進員の活動も2年目となったので、推進員としての重点目標を設定するようにした。4月の推進員会議において、地域の活動や学校行事



資料3 活動計画の作成の様子

を洗い出し、地域学校協働活動推進員の活動計画

の作成(資料3)と、今年度の重点目標の設定を行った。コロナ禍にあり、活動の変更の可能性がある中で、活動の広報や啓発、活動の成果や課題の吸い上げに重点を置き、地域学校協働活動を進めていこうという重点目標を設定することができた。活動計画と重点目標を一緒に設定したことで、地域学校協働活動推進員としての当事者意識を高めることができた。

また、月に1回実施した推進員会議の中でも、常に重点目標を提示し、重点目標と関わりのある活動を意識できるようにしていった。そうすることで、地域学校協働活動推進員として、何を活動すべきかが明確になっていった。

### ② 活動と相談会の実施 (D 段階)

学校支援ボランティアを活用した活動や地域連携カリキュラムを、でき得る限りで実践していった。1年生では、表2のような実践を行った。

表2 1年生実践

学 年 : 1年
教 科 : 生活科
単元名 : ひろがれえがお
学習内容 : お手伝いをするために、保護者ボランティアに教えていただきながら、できることを増やしていく。

1年生では、まず身近な地域の方として保護者を活用した実践を行った。食器洗い、配膳、お米洗い、洗濯ものたたみ、靴並べ等を、お母さん先生、お父さん先



資料4 1年生実践の様子

生に教えてもらい(資料4)、お母さん、お父さんのすごさに気付く姿が見られた。また、教えてもらったことを、家庭で実践するチャレンジ週間を経て、家庭で感謝される体験もできた。低学年の目指す姿である「地域(ひと・もの・こと)の素晴らしさに気付き、感謝の気持ちをもつ」だけでなく、自己有用感も高めることができた。

チャレンジ週間後の保護者の感想からは、子どもへの感謝の気持ちや、どのように子どもと関わっていくことが大切なのかが書かれていた(表3)。

表3 保護者感想

もともとお手伝いは好きな方でしたが、この授業がきっかけで自分から進んでやってくれるようになりました。私の方も面倒臭がらずに、子どもの「やりたい!」という気持ちにできる限り応えたいと思いました。いつもお手伝いありがとう!ととてもたすかっています。これからもよろしくね!

子どもだけでなく、保護者にとっても有意義な学習となったことがうかがえた。

4年生では、表4のような実践を行った。

表4 4年生実践

学 年 : 4年
教 科 : 総合的な学習の時間
単元名 : 春日の祭り魂
探求課題 : 春日に伝わる祭りについて調べる。

昨年度の見直しで単元開発を行った単元で、各地域の夏祭りや春日市で行われるあんどん祭りについて、自治会長や祭り振興会の方にお話を聞きながら探究活動を行った。直接話を聞くことで、祭りの内容だけでなく、祭りに関わる人々の思いや、続いてきた理由について知ることができた。

さらに、各地区別にインタビューした内容を交流し合い、行われていることは違っても「人と人とのつながりをつくりたい」という思いは共通していることに気付いていった。その思いを知ったことで、今度祭りがあつたら参加したいという子どもたちの感想も多く見られた(表5)。

表5 相互交流後の感想

それぞれの祭りのよさ、楽しさがあってすごいと思った。説明を聞いて、屋台の数や楽しさ、人数、祭りのよさを知って、今度あつたら行ってみたいと思った。地域の一員として、祭りがあつたら自分たちから進んで祭りに参加したい!大変そうだから手伝いをしてみたいと思った。
---

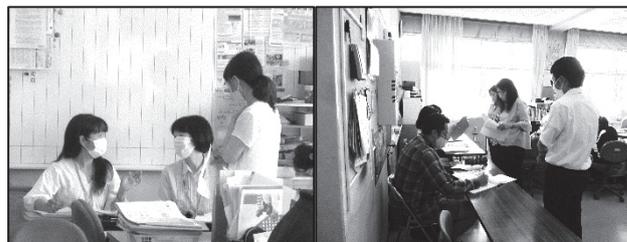
中学年の目指す子どもの姿である「地域(ひと・もの・こと)への関心を高め、積極的に関わろうとすることができる」に向けて、最後の還す活動について子どもたちと4年生担任とで考えていった。祭りがなかなかできないので、校内で「春日野あんどん祭り」を開いて、地域の方を招待しようと企画し、実践を行った。

しかし、以上のような地域連携カリキュラムを進める上での困りごとや人材発掘など、教職員だけでは難しい面があつたので、地域連携カリキュラム相談会を研修計画(表6)に位置付けた。

表6 研修計画

予定日	研 修	サイクル
5/19(水)	・春日野小のCSの在り方 ・地域連携カリキュラムの見通し(相談会)	Plan
6/16(水)	・地域連携カリキュラムの相談会	Do
7/30(金)	・地域合同研修会	Check Action
9/15(水)	・地域連携カリキュラムの後期の見通し	Plan
11/17(水)	・地域連携カリキュラムの相談会	Do
1/19(水)	・地域連携カリキュラムの見直し (次年度へ向けて)	Check Action

年間6回の相談会(資料5)を設け、実践できる形を一緒に模索したり、地域学校協働活動推進員にアドバイスをいただいて、地域とのつながりを感じるための方法を見出したりする姿が見られた。相談会を繰り返す中で、子ども達の市民性育成のために、どうにか地域連携カリキュラムを進めようとする教職員の姿も見られた。



資料5 相談会の様子

さらに、実施した地域連携の姿を通信で発信し、他学年がどのように地域と関わろうとしているのか、その成果としての子どもの姿などを伝えるようにした。そうすることで、実施した学年への価値づけになり、実施できていない学年へは、コロナ禍でもできる活動があることを意識づけることにつながった。

③振り返りと地域合同研修会の実施(C・A段階)  
ア 推進員会議での振り返り

昨年度は、でき得る地域学校協働活動が行われていたものの、その活動の評価や改善まで行われていないものもあつたため、次の活動へ生かすことができていなかった。そこで、今年度は、地域学校協働活動が、活動の実施だけでなく、よりよい活動の在り方を考えることができるように、推進員会議の内容を再検討した。毎月1回実施している推進員会議の内容に、地域学校協働活動の振り返りを必ず入れるようにし、参加者の声を参考に、成果や課題について話し合うことができるようにした。

出てきた成果については、教職員への通信等でも発信し、関わった人すべてが「やってよかった」という思いを共有できるようにし、課題については、よりよい方法を考えながら、次の活動に生かすことができるようにした。

また、CS進捗状況評価や市民性評価(児童)についても、推進員会議で、数値として出るデータを基に分析し、改善案を考えていった。それを職員会議にも提出するようにして、推進員会議でどのようなことが話し合われ、成果や課題をどうとらえているのかを共通理解してもらうようにした。

## イ 地域合同研修会

地域連携カリキュラムが市民性の育成につながっているのかの評価・改善を行うために、地域合同研修会(資料6)を実施した。教職員と学校運営協議会委員だけでな



資料6 地域合同研修会の様子

く、地域学校協働活動に関わってある保護者ボランティアやPTA本部役員、読み聞かせサークルの方々と一緒になって前期前半の活動の成果や課題を共有した。実際、前期前半にできていない活動や形を変えなければならなかった活動も多く、単元のよさを理解し合う程度の時間となったが、学校が育てたい資質・能力をもとに学習づくりを行っていることや、コロナ禍で工夫しながら実践しようとしていることを理解してもらうよい機会となり、高い評価を得ることができた。

また、感想も非常に前向きなものが多く見られ(表7)、実際に、実践を見て、子どもの姿で共有する場の大切さを感じた。

表7 地域合同研修会の感想(一部抜粋)

- ・春日市の市民性を理解していくため、低学年、中学年、高学年で順番に目標設定があり、とても分かりやすいと思います。学校、保護者、地域がそれぞれ工夫を持って取り組むことが増えていけばいいと思います。(保護者)
- ・学校の取組が、各学年、具体的でよくわかりました。学校・家庭・地域の連携の大切さを改めて感じました。コロナ禍ではありますが、地域として、何ができるか考えていきたいと思います。(地域の方)

## (3) 学校運営協議会の在り方の見直し

コミュニティ・スクールとして地域学校協働活動との一体的推進が図られるためには、何を柱として学校運営を行っていくのか、その柱の設定が必要不可欠になってくる。そこで、地域連携カリキュラムに関する内容を熟議の柱とし、実際の活動や子ども達の様子を通して、育てたい資質・能力の育成につながっているのか、評価・改善していけるように、学校運営協議会の年間計画を作成した。その年間計画(表8)を、第1回の学校運営協議会で提示することで、学校運営協議会委員の方々が、学校に訪れた際に、そこを視点として見てもらえるようにした。

表8 学校運営協議会の年間計画

回数	日程	熟議題
1	5/13 (木)	地域連携カリキュラムについての提案 (年間の熟議の柱の設定)
2	7/30 (金)	地域連携カリキュラムの成果や課題 (地域合同研修会の感想等)
3	10/20 (水)	地域連携カリキュラムについての実践と評価 (地域合同研修会での課題を受けて)
4	12/10 (金)	地域連携カリキュラムの成果や課題 (後期の実践を見て)
5	2/15 (火)	本年度の振り返り

また、学校運営協議会と地域学校協働活動がそれぞれ機能化するだけでは、一体的推進は図られない。そこで、地域学校協働活動で明確になった成果や課題のうち、何を学校運営協議会の熟議の議題とするのかを推進員会議の中で話し合うようにした。第3回の学校運営協議会では、地域合同研修会で課題となっていた「保護者への啓発の仕方」について熟議を行い、様々な意見をいただくことができた。

さらに、その学校運営協議会において、本年度より立ち上げたコミュニティ委員会の児童を参加させた。本年度より立ち上げであったので、活動内容について



資料7 学校運営協議会の様子

伝えていった。さらに、実際に活動が少ない中で、どのように、春日野小学校の取組を全校児童に啓発していくのかを、委員会児童なりに考え、発言していった(資料7)。市民性アンケートの結果を子どもたちなりに分析し、啓発のためのお便りづくりを行っていることや、全校児童が見やすい工夫をしていることなどをしっかりと発言することができた。子どもたちの活動に対する思いを聞いたり、学校運営協議会委員の質問にしっかりと答える姿を見たりすることで、子どもたちの成長を感じていただき、大人だけの話合いではなく、子どもたちが参加できる学校運営協議会の必要性についても議論することができた。

また、第4回の学校運営協議会では、地域連携カリキュラムの実践内容を共有した上で、次年度へ向けての意見等をもらい、評価をしていった。その際、再度、目指す子どもの姿を確認しながら、成果や課題を意見としてもらえるようにした。

## 7 全体考察

### (1) 教職員の意識の変容

表9 CS進捗状況評価(教職員)

(1年次5月N=34, 1月N=28, 2年次7月N=32, 12月N=23)

項目	質問内容	1年次 5月	1年次 1月	2年次 7月	2年次 12月
I⑫	地域コーディネーターは、学校と地域とのつなぎ役になっていますか。		3.4	3.6	3.5
I⑬	CSの目的や仕組み、取組について、教職員へ周知されていますか。	2.9	3.3	3.3	3.4
I⑭	CSの目的や仕組み、取組について、子どもへ周知されていますか。	2.0	2.3	2.9	3.0
I⑮	CSの目的や仕組み、取組について、保護者へ周知されていますか。	2.4	2.6	3.0	3.2
I⑯	CSの目的や仕組み、取組について、地域・市民(保護者以外)へ周知されていますか。	2.0	2.3	2.8	2.8
II①	外部人材を活かしたカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	3.0	2.9	3.2	3.0
II②	自然、文化、伝統、施設等を活かしたカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	3.0	3.0	3.1	3.0
II③	子どもと地域の人が共に学ぶカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	2.6	2.6	2.8	2.9
II④	地域に参画・貢献するカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	2.5	2.5	2.6	3.0

教職員のCS進捗状況評価の結果(表9)より、地域学校協働活動推進員の活用について(I⑫)は、高い数値で推移している。CSの周知について(I⑬~⑯)は、全ての項目でポイントが同じか上昇している。地域連携カリキュラムの整備・取組について(II①~④)は、特に重点を置いた地域に還す取組についてのポイントが上がった。コロナ禍にあり、実践が難しい中でも、このような上昇が見られたのは、地域連携カリキュラムについてPDCAサイクルを教職員が実際に体験し、仕組みや取組について共通理解できてきた成果であると考えられる。

また、地域合同研修会後に行ったアンケートの自由記述について、KHCoderでテキストマイニング分析を行った(図6)。

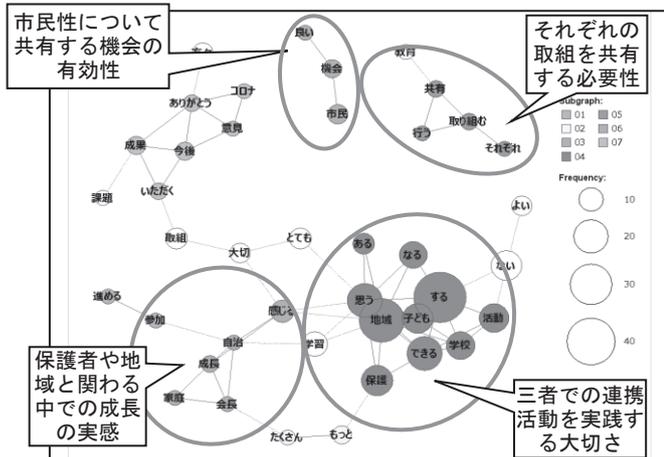


図6 自由記述分析結果(N=26 総抽出語数2,124)

出現回数が一番多い名詞は「地域」であり、「保護者」や「学校」「子ども」という名詞も多く見られたことから、三者(もしくは四者)での活動や実践の大切さを感じていることが分かる。また、動詞では「する」「できる」「思う」という言葉が多く見られ、活動実践に向かって意欲が高まっている様子うかがえた。

また、共起ネットワーク図(図6)から三者での連携活動の実践と、成長の実感は結びつきがあることが分かる。しかも、それを結び付けているのが「学習」であることから、地域連携カリキュラムを通して、子どもの成長を実感する場があることにより、連携活動の重要性を感じ、次の実践へ結びついていくということを教職員が実感していることが分かる。

### (2) 地域・保護者の意識の変容

表10 CS進捗状況評価(学校運営協議会委員)

(1年次5月N=14, 1月N=9, 2年次7月N=11, 12月N=8)

項目	質問内容	1年次 5月	1年次 1月	2年次 7月	2年次 12月
I⑫	地域コーディネーターは、学校と地域とのつなぎ役になっていますか。		3.7	3.1	3.1
I⑬	CSの目的や仕組み、取組について、教職員へ周知されていますか。	3.1	3.1	2.9	2.9
I⑭	CSの目的や仕組み、取組について、子どもへ周知されていますか。	2.4	2.4	2.4	2.6
I⑮	CSの目的や仕組み、取組について、保護者へ周知されていますか。	2.6	2.4	2.0	2.5
I⑯	CSの目的や仕組み、取組について、地域・市民(保護者以外)へ周知されていますか。	2.6	2.9	2.1	2.9
II①	外部人材を活かしたカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	2.9	2.7	2.5	2.9
II②	自然、文化、伝統、施設等を活かしたカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	3.1	2.9	2.8	3.6
II③	子どもと地域の人が共に学ぶカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	3.1	2.6	2.8	2.6
II④	地域に参画・貢献するカリキュラムの整備・取組が行われていますか。	3.0	2.8	2.3	3.0

学校運営協議会委員のCS進捗状況評価の結果(表10)においては、コロナ禍により厳しい評価であったものが、少しずつポイントが上がってきている。特に、地域連携カリキュラムの整備・取組について(II①~④)は、大きな上昇が見られた。後期に活動実践ができるようになり、たくさんの学習において、地域の方々や子どもたちとの関わりが増えたことによる成果であると考えられる。

さらに、地域合同研修会後の地域・保護者のアンケートの自由記述についても、KHCoderでテキストマイニング分析を行った(次項図7)。「わかる」や「考える」という語も出現し、地域合同研修会を行ったことにより「学校が何を目的として

活動実践を行っているかということがわかった」など、目標・目的の共有ができてきていることが分かった。また、その上で「保護者や地域でできることを考えたい」という前向きな意見も見られ、共に取り組むコミュニティ・スクールとしてのよさを感じてきていることがうかがえた。共起ネットワーク図（図7）からも「子ども」を中心としながら、活動や取組を知ったり、内容を理解したりする上で、地域合同研修会がよい機会となったことがうかがえる。

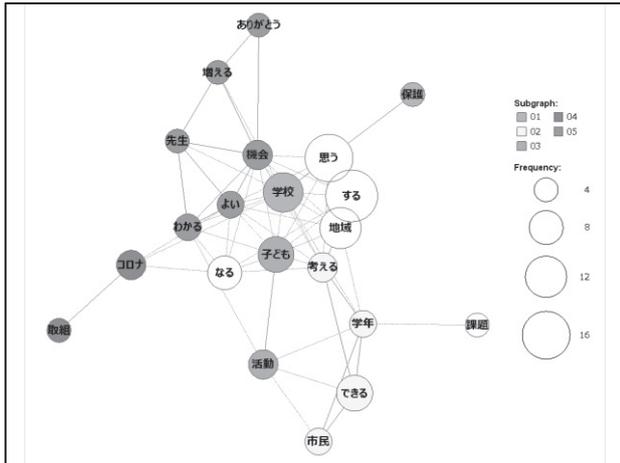


図7 自由記述分析結果 (N=18 総抽出語数 1,100)

また、第4回の学校運営協議会では、表11のような意見も見られ、一体的推進を進めてきたことにより、地域連携カリキュラムを通して子どもの育成を図っていくという意識を高めることができたことにつながった。

表11 実践に対するご意見・ご感想（一部抜粋）

地域連携カリキュラムの活動に、たくさんのGTや保護者が参加できるようになったことを嬉しく思います。子どもの学んだ内容についてアウトプットする場面を是非たくさんの方に見てもらえることができれば、地域連携カリキュラムの存在も、保護者に知ってもらえますし、コミュニティ・スクールとしての進捗状況の評価にも生かせるのではないかと思います。

## 8 成果と課題

### 【成果】

○地域連携カリキュラムをマネジメントしていく上で、計画・実施・評価・改善の活動を研修計画に位置付け、そこに地域学校協働活動推進員を関わらせたことは、教職員の当事者意識を高め、実践に結び付けようとする態度を生み出すことにつながった。

○地域学校協働活動のCheck・Action段階として地域合同研修会を実施したことは、保護者や地域住民への理解を図ったり、成果や課題を共有したりする上で有効であった。

○推進員会議を定期的に行い、そこでの課題と学校運営協議会での熟議題を関連付けたことは、一体的推進を生み出す上で有効であった。

### 【課題】

○地域連携カリキュラムの継続のために、研修部との連携を図っていく必要がある。

○地域学校協働活動の活動実践を、学校だけでなく地域や家庭の方まで広げ、地域と子どもたちとの関わりを増やしていく必要がある。

## 主な引用・参考文献

- 1) 文部科学省 2015 教育課程特別部会における論点整理について(報告) [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiefieldfile/2015/12/11/1361110.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiefieldfile/2015/12/11/1361110.pdf) (参照 2020/4/20)
  - 2) 文部科学省 2016 新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申) 中央教育審議会 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afiefieldfile/2016/01/05/1365791\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiefieldfile/2016/01/05/1365791_1.pdf) (参照 2020/4/20)
- 文部科学省 2020 これからの学校と地域 コミュニティ・スクールと地域学校協働活動 [https://mana-bi-mirai.mext.go.jp/upload/korekaranogakkouto-tiiki\\_pamphlet2020.pdf](https://mana-bi-mirai.mext.go.jp/upload/korekaranogakkouto-tiiki_pamphlet2020.pdf) (参照 2020/4/13)
- 文部科学省 2021 令和3年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実践状況調査について(概要) [https://www.mext.go.jp/content/20211122-mxt\\_chisui01-000018965\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211122-mxt_chisui01-000018965_1.pdf) (参照 2021/11/24)
- 春日市教育委員会 2011 春日市発! コミュニティ・スクールの魅力 11頁 ぎょうせい
- 春日市教育委員会 2014 コミュニティ・スクールの底力 共有基盤形成9年の軌跡:「必要」から「必然」へ 北大路書房
- 春日市教育委員会 2021 エデュケーションかすが～春日市の教育～

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修機会を与えていただき、ご支援いただいた福岡県教育委員会、春日市教育委員会に心より感謝申し上げます。また、在籍校の校長先生、地域学校協働活動推進員をはじめ、関係の諸先生方に多大なるご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます、謝辞いたします。